

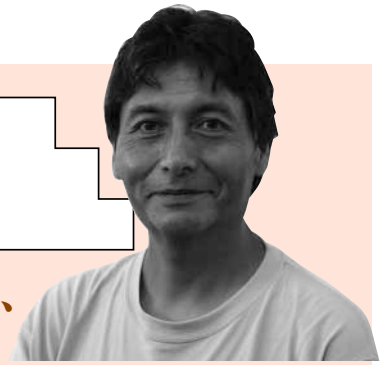
今

この人へ

Interview

物語作家／イラストレーター

ホセ ロメル デ ラ コリーナ カルボさん



一番好きなのは、物語を作ること。チャンスを広げて、滋賀から世界へ発信していきたいですね。

■ホセさんは、大阪から滋賀に引っ越してこれましたが、滋賀の印象はどうですか？

私は、滋賀が大好きです。私はペルー南部のプーノの出身なんです。そこにはチチカカ湖という大きな湖があります。私はいつも湖のそばで遊んでいたから、琵琶湖がある滋賀にはとても親しみを感じますね。

また、大阪で親しくなったのは仕事の仲間ぐらいでしたが、都会は家も狭いので、出かけて行ってもゆっくり家の中で話すことがありませんでした。でも滋賀では、みんなどうぞ家に入ってと言ってくれます。人間関係の面でも、滋賀はいいところだと思います。

■1994年からファンタジーの世界を描くようになったそうですが、それ以前から絵を描いておられたのですか？

絵を描くのは子どもの頃から好きでした。専門学校でシルクスクリーン印刷を勉強して、22歳の時にTシャツにプリントをする会社を作って、自分の絵もプリントしていました。その前は焼物の工場で働いていて、デザインを担当していました。日本に来るま

では、アート関係の仕事をしていましたね。

日本に来た頃から絵を描き始めました。子どもの教育とか、両親に家も建てたかったのでお金を貯めるために一生懸命働いていましたが、ストレスがたまると、絵を描いたり物語を作ったりするようになったんです。僕は走ることが大好きなのですが、走りながら物語を考えることもありますね。

■架空の動物の絵のイメージはペルーの伝統的な物語など関係あるのですか？

多分、少しあると思います。私の父は学校の教師で、アンデスの山奥の村で教えていました。それで、母や他の家族は町中で暮らしていて、父と長男の私は、月曜日から金曜日までは山奥の村で生活し、土日は町の家に戻るとい暮らしをしていました。そういう田舎暮らしの経験から生まれたものかなと思います。日本に来てからは、河童の物語を作りました。ペルーにはカラスがいないので、日本で初めて見たのですが、カラスの物語もいくつも作ったんですよ。

▲日本に来たときから、いつか外国人はリストラされるのではという覚悟ができていたというホセさん。

●プロフィール

1958年、ペルー共和国のプーノ地方、パラ市に生まれる。1978年、リマの技術専門学校を卒業。結婚し、2人の子どもに恵まれる。1992年来日、大阪で8年間働いたのち一時帰国。1994年より、架空の物語とイラストの創作を始める。2000年に再来日し、滋賀県愛荘町で働きながら、創作を続ける。2008年、愛荘町文化祭に「幻想の動物たち」を出品、その独特な世界が注目されるようになり、現在、創作した物語を出版するための準備をしている。

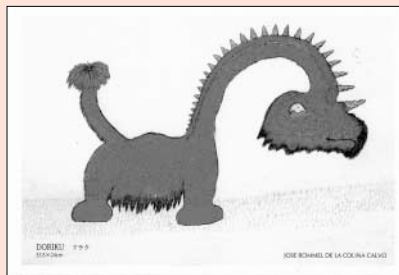
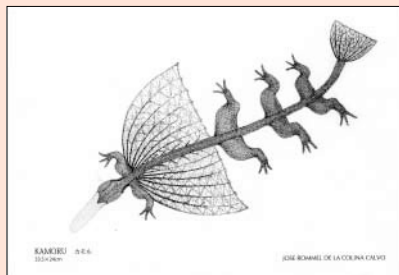
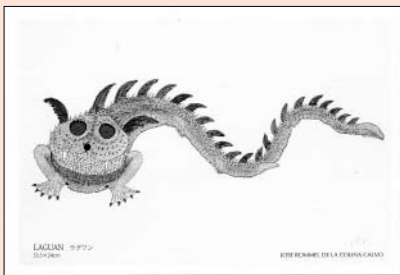
■今年初めて、ギャラリーるーぶる愛知川で展覧会を開かれましたが、何かきっかけがあったのですか？

愛荘町に住んでいる画家の藤井譲さんとご夫人の昌子さんが私の作品を見て、町の文化祭に作品を出品するように勧めてくれたんです。そこで私の絵が評判になって、地元の人にもっと作品を見てもらおうと、るーぶる愛知川で展覧会を開きました。このときは大阪や奈良などからもお客さんが見に来てくれました。

■昨年12月にリストラされたそうですね。それでも絵を描き続けておられるのは、やはり夢があるからですか？

リストラに遭ってなかなか仕事が見つからないのは大変ですが、絵を描く時間が増えるということではチャンスだと思います。私が一番好きなのは、物語を作ることなんです。るーぶる愛知川で展覧会を開いたことで、テレビ局や新聞社の取材を受け、出版社の人から、絵本を出版したいという話を持ちかけられました。今まで書きためた物語はノートに60冊ぐらいありますが、そのうち6冊を、出版社の人に送って、出版の検討をしています。

他にもチャンスはあります。例えば、ハガキやカレンダー、Tシャツなども作れます。物語のアニメも協力を得られれば作れます。私の作品を誰かが見てくれることが、チャンスを広げるきっかけになると思うので、もっといろんな所で展覧会を開きたいと思っています。そして滋賀から日本全国、世界に向けて、オリジナルの物語を発信していきたいですね。



▲ホセさんの描く、架空の動物たちのイラストのポストカード。4枚1組400円で販売している。